明石の史跡（３７）幻の明石離宮

明石市の下水道の歴史は、前身たる明石町時代に始まる。明治３２年（１８９９）６月８日、豪雨による浸水被害が、明石町の過半に及んだ。主因は、下水溝の不備であった。同月２２日に、宮内省よりの下賜金３００円が、下水溝改善へのきっかけとなった（明石市史下．２９４頁）。宮内省によるこのような対応は、前年（明治３１）１０月５日、明石城跡の全域が、皇宮地付属地に編入されたという事情を無視することはできない（明石公園百年史Ｐ１０８頁）。

具体化への歩みは、明治４２年（１９０９）になって加速する。この年町会では、下水道築造調査費を議決。６月には兵庫県技師の佐藤長太郎に調査監督を、岩淵宗に実測を各嘱託。翌４３年（１９１０）５月の調査完了をまって、町会では下水道築造の議が議決をみることになる（日本下水道史－技術編．７８頁。この項は山下俊郎氏の御示教による）。

明治４４年（１９１１）・２・１１、明石町民は、「明石離宮内定」というスクープ記事を見て驚くことになる。

［二・一一、大朝］明石離宮　〇豫て離宮の御用地と内定し居れる明石舊城内に、今回愈愈離宮を御造営相成るやにて、福羽内苑頭は三月中旬実地調査の為同地に出張する由なるが、右は来る五十年の大博覧會開始までに日本国風の御殿を御造営相成り、生として外国貴賓の御宿泊所に充てらるるものなりと承る（新聞集成明治編年史１４．３７３頁）。

この朗報も、翌明治４５年（１９１２）７月２９日に明治天皇が崩御。翌日大正天皇の即位となり、うたかたの泡のごとく消滅してしまう。もし離宮が実現していれば、町のイメージは格別のものとなっていたことであろう。

日本歴史学会会員　茨木　一成